誰が為に、鐘は鳴る。

井口亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰が為に、鐘は鳴る。

【Ｎコード】
Ｎ５９１５Ｙ

【作者名】
井口亮

【あらすじ】
ヨッドヴァフ王国首都グロウリィドーン。その片隅に『冒険者』と呼ばれる人種が集まる店『リバティベル』がある。金貨五枚で人殺しを請け負ってくれるこの店に来客が来た夜、グロウリィドーンの夜に鐘が鳴り響き、『褐色の幽霊』が現れる。奴隷、英雄、魔物……そして、王。全てをスタイアの剣が断ち斬る。「まんず、まず、斬りに行こうか」

第1章　『最も弱き者』　1

夜空を覆った雲が静かに雨を落とす。
ヨッドヴァフ王国首都グロウリィドーンを静かに霧の中に沈め、路地をふらふらと歩く少女を叩く。
目深に被ったフードの先から水滴がしたたり、その水滴の向こうに酒場の明かりが見えた。
酒場の明かりの上に立てかけられた古びた看板にはリバティベルと描かれている。
じんわりと明るい光の中から、雨を抜けて喧噪が柔らかく響く。
雨に追い立てられ人気の無くなった町の静けさの中、その喧噪が妙に暖かく聞こえた。
少女は吸い寄せられるようにリバティベルに入ってゆく。
ドアがキリキリと音を立て、鐘が鳴る。
活気がある、といえば聞こえはいい。
冒険者と呼ばれる人種が集まる酒場は大概がこんなものだ。
響き渡る下卑た笑い声に、カップが打ち合わされる音が混ぜられ反響する。

「リバティベルへようこそ」

店主が力なくそう告げるが少女は目もくれずに店の奥へと歩を進める。
店主はその後ろ姿をほんの少しだけ見つめると、また、黙々と食器を運ぶ作業に戻る。
少女はちらりと後ろを見てその姿を確認すると冒険者の背中にぶつかりながらテーブルの間を縫うように歩く。
少女の纏った汚れた外套は悪臭を放っていたが、冒険者が集まる

店では気にはならない。
むしろ、新品を誇らしげに使っているのは仕事をすれば汚れることを知らない駆け出しの冒険者と見られ、稼げる仕事を斡旋してもらえない。
だが、少女はたまたま着られる服がそれだけしかなかっただけで選んだわけでもなく、また、仕事をもらいに来た冒険者でもない。
仕事が無いから泥棒をしにきたのだ。
店の中を素早く見て、獲物になりそうな人間を捜す。
店の奥で強い酒気を放ち、寝ている男が居た。
少女はその男に決めると歩み寄る。
男の腰にぶら下げられた袋を奪うと自分の懐に入れる。
男が僅かに身じろぎし、心臓を掴まれたような悪寒が背筋を走った。
だが、男がそれでも起きることなく寝返りを打つのを見て少女は胸をなで下ろしそそくさとその場を離れる。
怪しまれないように誰かを探す素振りを装い、テーブルの間を抜ける。
店の入り口まであと少しというところで、誰かに襟首を掴まれた。

「誰かを探しているんですかね？」

店主の男だった。
よく見れば、まだ若い。
がしかし、だらしなく曲がった背中と、力なく落ちた肩、どこかとぼけた顔が貧弱な印象を与える。
だけど、自分を片腕で吊り上げる膂力はそれなりに鍛えているものだとわかる。
少女の心臓が早鐘のように鳴り響き、口の奥がからからに乾く。

「少し、待ってみた方がいいですよ。うちのお客さんは僕と一緒

でルーズな人が多いからね」

店主は少女の襟首を掴んだまま、カウンター席に運ぶ。

堅い椅子に半ば無理矢理座らされた少女は、自分のやったことを咎められるのではないかと気が気ではなかった。

「お腹も空いてるでしょう。何か食べていくといい……ラナさん。なんか作ってくださいな」

店主は少女の隣にどっかりと座り込むと、厨房の奥に視線を走らせる。

厨房の奥から不機嫌そうな顔をした女性がパスタの盛られた皿を持って来る。

少女の前に置かれたパスタが湯気を立て、バターの匂いが少女に空腹を思い出させた。

ここ三日、食事にはありついていない。

人の家の瓶に入った水を舐めるように飲む日々で、食事らしい食事をしていなかった少女には安酒場の食事でも凶暴なまでに食欲をそそられた。

危うく手を伸ばしそうになって、店主の方を見てしまう。

「おごりらしいですよ？シャモさんの」

店主の隣に、いつの間にか先程の酔客が座っていた。

「なんでぇ、俺のおごりなのかよ」

未だ酔いの抜けきっていない鈍い瞳をじろりと店主に向けて酔客――シャモンはカウンターにだらしなく肘をついた。

汚れた金髪に褐色の肌、無精ひげの並ぶ顎の上にけだるげな瞳が

酒気を帯びている。

「そこは、それ、なんだ。あれだ。可哀想な浮浪少女がお腹を空かせてお店に入ってきた。おじちゃんは泥棒されていることに気がついてても気がつかないフリをして優しさを世知辛い世の中に伝えたってのに、スタさんはそこから巻き上げるのかい？」

「あれ？そのお金で何か食べなさいって意味じゃなかったんですか？」

「そういう意味だけど、そこはあれだろ。こう、スタさんが温情かけて黙って何かを差し出すのが粋って奴だろう？」

「こっちも商売ですからねえ」

「商売？商売っつったか？冗談だろ？客に飯作らせて食べてる店主に商売っ気なんかあるわけないだろうに」

店主は面白そうに笑うとパスタにフォークを伸ばす。

店主――スタイア・イグイットもだらしなくカウンターに肘をつくとくずるずると音を立てながらパスタを飲み込んだ。

「まぁ、冷めないうちにどうぞ」

先程、ラナ、と呼ばれた女性がカウンターにスープを並べていく。

シャモンはそのスープの中にパスタをくぐらせてくちゃくちゃと食べはじめる。

少女はそこで、ようやく、自分が施しを受けたのだと気がついた。

「ふざけんな！」

少女がカウンターを叩き、食器が浮く。

「喰え」

憤る少女の鼻先にフォークをつきつけてシャモンは低く言った。
「……立場を選べるのは強い者の特権だ。弱いモンが何言ったところで、それがどうしたって言われるだけだ」
そう言ってパスタをまたくちゃくちゃと食い始める。
少女の鼻頭が熱を持ち、視界を歪ませる。
少女は手づかみでパスタを口に詰め込むと、咀嚼せずに飲み込む。
ひったくるようにシャモンとスタイアのスープを引き寄せると飲み干そうとして熱さに咽せる。
「皿に足が生えて逃げるわけでもあるまいに」
スタイアは苦笑し、背中をさするがその態度が少女の癪にさわった。
詰め込むだけ詰め込むと、ラナが店の奥から冷えた果汁を持って来たのを奪い、一気に嚥下する。
飛び跳ねるように、椅子を降りると少女は店の入り口で鋭く二人を睨みつけて吠えた。
「お礼なんか言わないしお金だって返さないからね！た、頼んだわけでもないし！」
「辛い目にあってきたのは見ただけでわかる。腹が減ったら来なさい」
スタイアにそう言われて少女はぐっと鼻頭が熱くなったが叫ぶ。
「……っ、ばーか！ばーか！もう二度とこんな店来るか！」

ドアについた鐘が激しく鳴り響き、少女は再び雨の中に消えてゆく。
店の中の誰もが気には止めていない。
いや、気に止めている者も居たが声をかけるようなことはしなかった。
喧噪に紛らわせてはいるが、ここに居る誰もが厳しい中で生きている。
それらは決して、人が背負えるものではなく、自分で背負っていかねばならない。
自らの重荷に人の重荷を乗せるのは難しい。

「世知辛いモンですねえ」

何かを代弁するかのようにスタイアはそう呟いた。
ラナが新たに持ってきたエールを傾け、酒気の混じった吐息を落とす。

「……国は栄えたとはいえ、あんな子供が居るってのはやりきれないですねぇ。まだ、親に甘えたい年頃でしょうに」

シャモンは苦虫を噛みつぶしたような顔をした。

「あんまし、背負い込むんじゃねえよ。全部を背負えるだけ、人間の背中ってのは丈夫じゃねえだろ。時折手を貸してはやれるが全部を背負っちまえば、全部を背負わせようとするのもまた人間の浅ましいところだぜ？」

スタイアは苦笑する。

「僕が子供の頃は奴隷制度ってのが残ってましたよね。あれはあ

れで酷いものなんだけど……それでも生きていくだけならいいものだったんでしょうねえ」
「解放した奴隷の受け入れ先が無いから冒険者制度なんてモンをつくったんだろう？魔物の被害が多くなったのもあったから、働く場所が無い連中に組合はおろか騎士団、教会、王立大学、国の専門機関が広く技術を解放してその対策に当たらせる」
「大人はいいですよ。いくらでも働ける。だけど、いつだって時代のあおりを喰うのは子供達なんですよ」

スタイアはそれだけ言うと、席を立ちエプロンを付ける。

「なんだよ。もう終わりかよ。付き合わないのか？」
「野郎と二人雁首揃えて飲んでも面白くないでしょうに。仕事しますよ仕事」
「ウェストグローリィロードの裏通りに新しいランパブができてな？ジェリカちゃんって娘がいいおっぱいしてンだよ。おごるぜ？」
「わかりましたよ。揉みに…じゃなかった拝みにいきましょうか」

付けたエプロンをカウンターに掛けて店を出ようとするスタイアにラナが黙って袋を投げつけた。
後頭部に重い音を立てて当たった袋は地面に落ちて、銅貨を床にいくつかばらまいた。

「わおう。そういやシャモさんお金全部あげたんだっけ？」
「しまった！お釣り貰っておくべきだった！」

ラナは大きな溜息でもって返した。

第1章　『最も弱き者』　2

ヨッドヴァフ王国。
ヨルグン大陸の東側に位置し北にアブルハイマン山脈、東に大海洋、南にヨシュ砂漠、西にコルカタス大樹林が存在する。
他国の侵略を受けづらい地形に守られ、広い領土を有する国で主に外洋を通じて他国との通商を行い、発展を遂げてきた。
比較的温暖な気候であり、農牧が盛んな平原地帯を含め、鉱物資源をアブルハイマンに求めることができ、豊かな国力を誇っていた。
通常、他国からの侵略を受けづらい国家というのは発展しづらい。
戦争は国力を疲弊させるが技術を発展させる。
国民は他国に侵略される危機感に国の軍備拡張と技術発展を許すが、平時においてはまずその生活を豊かにすることを望む。
ヨッドヴァフ王国が国同士の戦争をすることなく大国となったのには理由がある。
魔物の存在だ。
コルカタス大樹林の奥に存在する秘境やアブルハイマン山脈の奥にある『秘境』と呼ばれる未踏の地で独自の進化を遂げた動物達。
これらは既知の動物らより遙かに高度な身体能力と知能を持ち、その生息域を人里に近い場所まで広げてきた。
この魔物の被害を食い止める為にヨッドヴァフ王国は軍隊を持たなければならなくなったのだ。

「とはいえ、王都の騎士団ともなると暇なモンですよね」

正午の鐘が鳴って、まだ間もない時間である。
ヨッドヴァフ王国首都グロウリィドーンの第七騎士団詰め所の騎士団長執務室のソファの上でスタイアは欠伸をした。

「なら、一つ、スタさんが部隊を率いて魔物討伐に行ってくれると助かるんだけどね？」

アーリッシュ・カーマインは騎士団に要請された任務を優先度順に選り分け、どの部隊を当たらせるかを一通り起案したものを羽ペンで海草紙に書き記すと欠伸をかみ殺すスタイアに苦笑した。

長い黒髪の間に、鋭い瞳を持つ凛々しい青年である。

職務中にも銀色の甲冑を着込む生真面目さは、隣で鎖で編んだ鎧下だけを無造作に着込んでいるスタイアとは正反対の印象を与える。

「嫌ですよぅ。それに、僕は準騎士ですよ？まさかよもや正規の騎士さん達を僕なんかが率いたら怒られちゃうじゃないですか」

「階級に拘るのは平時だからだよ。戦場に立てば本当に必要なのは勝つための力だけだということをみんな知ることになる。必要なら正騎士への申請をしておくが？」

「アっちゃんも酷いですねえ。正騎士になると途端に色々面倒な仕事が増えるんですよ？その上給料も殆ど準騎士と同じ。昇進したがる人の気がしれないですよ」

「準騎士はいつだって解雇できるんだ。それに、戦場に立てば真っ先に先陣を任されるのも準騎士。それはそれで楽じゃないさ」

スタイアはアーリッシュのしたためた書状を受け取ると、中身をチェックする。

「今が楽なら、それでいいじゃないですか」

ろくすっぽ中身を見ずに書類を返し、スタイアはまた欠伸をした。

「あなたがそのような態度だから、騎士の規律が乱れるんです」

騎士長室のドアが開き、厳しい叱責がスタイアに投げられた。
「おんや、フィルさんじゃないですか。一発ヤりませんか？」
「どこの国の挨拶ですか。恥を知りなさい」
スタイアが締まりの無い顔に喜色を浮かべて身を乗り出す。
フィルローラはそんなスタイアを見下すようにして鼻を鳴らした。
膝の裏まで伸びた綺麗なブロンド、芯の通った目鼻筋、不機嫌に歪められてこそいるがヨッドヴァフでは指折り数えた方が早い美人だ。
教会司祭の僧衣を纏い、清楚な佇まいの芯に強さを見せる魅力を持っている。

「珍しい。来ないようだったら教会まで見に行こうかと思ってたところでしたよ。ふっふふ」
「私は見世物じゃありません。用も無いのに教会まで来られても困ります」
「いやいや、美人という神に信仰を捧げるのは立派な用件だと思いますよ？親となり、子を作り、その巡り会いを作られた神の奇跡に感謝する。どうです？一発ヤりたくなりませんかね？」
「そんなことだから、いつまでたっても入門を許されない平信者なのです」
「だって教会の戒律ってしちめんどくさいじゃないですか」
肩で笑うスタイアにフィルローラは溜息をつく。
「して……どうしてまたこんなところに」
「いえ、教会と騎士団で合同調整中の案件についてですがタグザ隊とシルヴィア隊のいずれかを編入させたいと思いますして。アーリッシュ騎士団長のご意向を伺いに来ました」

「結論はどちらでもいい。がしかし、スタさん。あえて聞くけど、スタさんならどっちの部隊を入れる？」
「入れるっつったって、どっちもおっぱい小さいし、僕らから比べれば子供じゃないですか。入れるに入れられませんて」
スタイアが面倒くさそうに答えると、また、騎士長室の扉が開き、物々しい騎士装束を纏った少女が現れた。
「胸の大きさと腕の善し悪しとは関係なかろうがっ！」
開口一番怒鳴りつけたのは褐色の肌に金色の髪をなびかせた聖堂騎士のタグザだ。
「おわあ！居たなら居たと言えばいいのに。全くわかりませんでしたよ。まるで、あなたのおっぱいと同じくらいわかりませんでした」
「甲冑のせいで判らないだけだっ！きちんとあるべきところにある！眼を開いて良く見てみるがいいっ！」
「神は言った。『正しき姿は見ようとする者には見えない。真に正しき姿は常に己の胸にのみぞある』」
神妙に告げるスタイアに今にも斬りかかりそうなタグサの肩を引き、気勢を削いだのはその後ろに立っていた少女だった。
「……相変わらずですね。スタイア隊長」
「うっわ、ちっぱい二号も居たんですか」
ちっぱい二号と呼ばれた少女は怒ること無く小さく会釈する。
「この度、騎士団並びに聖堂騎士の業務統合に派遣されました。

シルヴィア分隊士長のシルヴィア・ラパットとタグザ・ウィンブルグです」

シルヴィアは緩やかに毛先の巻かれた金髪と白い肌の美少女ではある。

だが、どこか暗い瞳が冷たさを感じさせる。

「なになに？なんでこの二人が来てるんですか？アっちゃん、僕聞いてないですよ？」

「言ってないからな」

アーリッシュは屈託なく笑うと、傅く二人に笑みを向けた。

「バルツホルドの戦い以来の聖堂騎士の勇士が今回の業務統合に加わってくれるとは頼もしい。早速だが、我が第七騎士団は現在、組織的な奴隷商の実態を把握しこれを壊滅せんとしている。奴隷の保有はいかなる理由があっても律法は許してはいない。また、君らが信仰する神も人が人を隷属させることを許してはいない。これらを滅する為に力を貸してはくれないか？」

「タグザ隊が」

タグザが前に進み出た。

「任せる。ダーツ正騎士長の指揮下に入り、委細を受けてくれ」

心得たとばかりにタグザが会心の笑みを浮かべる。

一人話題に取り残された形となったスタイアは二人の顔を交互に見つめる。

「ねえねえアっちゃん。どういうことだい？」

「騎士団と教会の保有する聖堂騎士は指揮系統こそ、それぞれ国王直下と教会と異なるけどその業務については重複するものが多い。だから統合しようという話があってね。試験的に聖堂騎士の受け入れを第三騎士団と第七騎士団で行うことになったんだ」

「へぇ、そうなんだ。聖堂騎士って女の子多いから楽しみだねえ。どぉれ、どの子から手をつけようかなぁ。へっへっへ」

「そうもいってられない。既存の部隊との業務割り振りやら編入手続きで忙しくなる。それらをやりやすくするため彼女らの階級は聖堂騎士のそれをそのまま準用するから士長扱いになることが決まっているんだが」

「げげ」

タグザが得意げな顔でスタイアを見下す。

「そういうことだ。口の利き方に気をつけたまえ。準騎士殿、私はここでは士長扱いになる。準騎士と士長では間に準騎士長、正騎士と二つ階級が違うことになる。次に私を侮辱しようものなら縛り首にしてやるからな？」

アーリッシュは苦笑し、シルヴィアに向き直った。

「シルヴィア隊は予備役として市街巡回の任についてもらうが騎士団と聖堂騎士では勝手が違うだろう。そこの暇そうな奴を使ってくれ」

ソファから飛び起きてスタイアが驚く。

「ひっど！アっちゃんと僕の仲じゃないか！もちっと楽させてくださいよ」

「だめです」

その襟首を掴んだのはシルヴィアだった。

「どうせ言われなければ働かないような人なんですから、馬車馬のように使ってやりたいと思います」

フィルローラがくすくすと笑った。

「いい気味です。これを機に勤勉に国家国民の為に奉仕するという騎士の大義を思い出すべきです。そうすれば神もきっとあなたの信仰心をお認めになりますわ」

アーリッシュはいたずらめいた笑みを浮かべて告げた。

「シルヴィア君、さっそくその穀潰しを連れて市街巡回に行ってくれ」

「了解しました」

「いや、ちょ、僕はこれから新しく来る聖堂騎士団からスタイル……じゃない、筋のいい子をみつくろってベッドの上で剣術指南するという重要な任務が……」

「そうですか、ならば、スタイア隊長の剣術の手ほどきをまず、隊長の私が受けてこそ他の部隊員にも示しがつくというものですね。稽古場でもベッドの上でもどちらでも倒れるまで相手をしてください」

「流石に僕もちっぱいは……」

ぐだぐだと言い訳にすらなっていない言い訳を述べるスタイアの首根っこを引っ張りシルヴィアが騎士団長執務室を後にする。

「……忙しくなりそうだな」

「でも、聖騎士と騎士団がその業務を分担できれば治安維持を図る上での足りない人手についての問題は解決します」
「騎士団の権益を侵されることにより、聖堂騎士との大なり小なり衝突は起こる。今のがいい例だ」
眉を潜めるアーリッシュにフィルローラは訝しむ。
「アーリッシュ卿は業務統合について反対なのですか？」
「大いに賛成だ。だからこそ第七騎士団で引き受けた。がしかし、問題はそこじゃあない」
苦笑し、懊悩を仕舞い込むスタイアにフィルローラは一抹の不安を覚える。
「どういったことに心を悩ませていらっしゃるのでしょうか？よろしければお聞かせ願えますか？」
「この国は多くの問題を抱えている。奴隷解放戦役を経て未だ解決されない奴隷問題、広がりすぎてそれが当たり前となっている貧富の格差。それらが作る階級意識が産む差別。今はそれでも不満無くやっていける。がしかし、国家百年を案じた時、それらは全て国を停滞させ、不利益しかもたらさない」
書類に署名を終えたスタイアは一息つくと目頭を押さえて溜息をついた。
「……こういう考え方は危険かな？」
「神意に悖れば危ういですが、真に民草のことを思ってらっしゃれば間違いは無いかと」
「強く、あれ、それが騎士也、か」

スタイアの苦笑はどこか悔しそうだった。

「どなたの言葉ですか？」

「スタイアの言葉だ。続きがあってね。精神的に打たれ強ければ大概のことはどうにかなるから、どうでもいい。シンプルでわかりやすいから僕も良く使うようになってしまったんだ。彼の中じゃあ、世の中はそのくらいシンプルなんだろうさ」

「まぁ」

フィルローラが驚く。

「まったく。信じられません。あの人は騎士としての秩序をないがしろにしています。ヨッドヴァフの栄えある騎士団の一員としての誇りを持って戴きたいものです」

アーリッシュは小さく、だが、はっきりと告げた。

「秩序があるから守るのではない。守るべきものがあるから規律があり、秩序が生まれる。それを正しく知り、そして行える騎士は果たして何人居るのだろうか」

「え？」

「彼の名誉は僕の名誉でもある。僕の親友の悪口を頼むから彼の居ない場所で僕に言わないで欲しい」

第1章　『最も弱き者』　3

グロウリィドーンは中央にグロウリィハイムを置き、東西南北に主要道路であるグロウリィロードが延びる。
北に工業区、東に住宅街、南に繁華街、西に商業区と区分けされ、それらを高い城壁が囲う形となっている。
城壁内部はひしめき合うように立てられた石材の建物の間を石を敷き詰めて造られた道が縦横に走り、主要道であるグロウリィロードに通じる。
ヨッドヴァフ首都が遷都する際に、区画整備され計画的に作られたことから大きくこの
形を取ることとなり、それは今でも変わらない。

「だけど、その後に首都に住むことになった人は城壁の外に住むしかなかったんだよねえ」

城壁の外にはいわゆる貧民街が広がっており、人の靴の底が作った道と木材で組まれたあばら屋が乱立していた。
スタイアとシルヴィアは貧民街に軒先を並べるマーケットを歩いていた。

「……聞いていた巡回経路と違うようですが」

首都に集まる人間でごった返す人混みは城壁内の繁華街の比ではない。
油断すれば帯皮に吊り下げた武器すら奪われそうな人の波だ。

「城壁の中なんか歩いてたって退屈でしょう？……騎士が本当に歩かなきゃならないのはいつだって外さ」

スタイアは人混みの中を楽しそうに歩いている。
「お高くとまった庭園の花より、気高く咲く野原の花の方が綺麗な場合も多々あるわけでして……可愛い子、結構いるんだなあこれが」
シルヴィアはスタイアの半歩後ろを歩きながら曲がった背中を見ていた。
「相変わらずですね」
「君もね。聖堂騎士の中ではタグザちゃんと二人、頑張ってるそうじゃないか。ユロさんから話は聞くよ」
「墓守のユーロからですか」
「信用に足る男ですよ。人は見かけによらないんだ」
「私は隊長に教えていただいたとおりのことを忠実に実践しているからです」
スタイアは渋い顔をする。
「シルちゃんは相変わらず堅苦しいねえ。もう一人のちっぱいみたく多少、性格を柔らかくした方がいい。それじゃあ、おっぱいと一緒で潰れちゃうよ」
「これでも大分、柔らかくなったツモリなんですが」
「おっぱい？性格？」
「両方」
スタイアはクツクツと笑うが、シルヴィアは笑わなかった。
シルヴィアは揺れる肩を見ながら目を細める。

「スタイア隊長はどうして、正騎士の地位を捨てたんですか？」
シルヴィアの生真面目な瞳がスタイアの背中に刺さった。
「本来、アーリッシュ騎士団長の場所に居るのはスタイア隊長であってもおかしくはないはずです。アーリッシュ騎士団長もそれを望んでいるはずです」
スタイアは苦笑を浮かべる。
「冗談でしょう？僕みたいなのが上に立てば規律もクソもあったもんじゃない。正騎士になって女の子とのいさかいを起こせば場合によっちゃその場で打ち首ですよ。おっかなくてなれたモンじゃない」
「スタイア隊長はそのような無駄なことはしない人です。私も無駄な質問をして時間を無駄にはしたくはないツモリで聞いています」
切り込むように尋ねるシルヴィアにスタイアは黙る。
僅かな沈黙の後、スタイアはもう一度苦笑を浮かべた。
「人の生き方を知ろうとすることはいいことだ。だが、君は誰かに誇らしげに語れる生き方をしていると胸を張れるかい？」
シルヴィアは難しい顔をして俯く。
「……申し訳、ありません。だけど、私には納得がいきません。私はスタイア隊長の指揮下でバルツホルドを戦い抜きました。そのバルツホルドの戦いの真の功労者が何故……」
「そんなことより、仕事でもしましょうか」

スタイアはすっと目を細めて、路地の先を見つめていた。
ぼろを纏った子供が露店の軒先から金貨を入れる篭を引ったくっていた。

「またお前かっ！この泥棒猫めっ！」

店主が怒声を上げてぼろを掴み、地面に引きずり倒すと棒を手にして激しく叩いた。
跳ね上がったぼろの中から転がり出てきたのは小さな少女だった。

「ぎゃうう！」

悲鳴に通行人の興味が一時、そちらに注がれる。
少女は悲鳴をあげながらも、篭を奪い返される前にその中の金貨を自分の口に押し込み嚥下した。

「飲み込みやがったな！吐けっ！吐けっ！」

通行人が一様に興味を失う。
シルヴィアにもその場の雰囲気だけでそれが恒常的に貧民街で見られる風景であるということを察することができた。

「あいよー、ちょっとどいてねー」

スタイアは人混みをかき分けてするすると露店の前まで近づく。

「吐けと言っているだろうが！」

見せしめ、という意味もある。
店主は怒り狂った形相で少女の腹を蹴飛ばしていた。

「騎士団ですよ。状況は見ていました。あとはこっちで引き受けますが……おんやぁ？」

足下で許しを請うように平伏し、震える少女にスタイアは見覚えがあった。

「あ……」

先日、店に来た泥棒の少女だ。

「ダメだダメだ！許せばこいつらはつけあがる！もう二度と盗みを働けないように指の骨を今ここで折ってやる！」

「律法の手続きを経ない私人の懲罰は、またそれも律法の裁きを受ける行為になります。今すぐその少女の身柄を引き渡しなさい」

遅れてやってきたシルヴィアが高圧的に店主を威圧した。

「こっちは喰うか喰わねえかの商売やってんだ！壁の中の人間に関係あるかってんだ！」

憤った店主が棒を力一杯振り下ろす。

「どっかで見た顔だと思ったら――痛ぁっ！」

少女の顔を覗き込もうとしたスタイアの頭に棒が振り下ろされ、鈍い音が響く。

激しく叩かれたスタイアの頭が地面の上で跳ねる。

流石に、騎士に手を挙げたとなって店主が青ざめた。

「え、あ！だ、大丈夫か？」
「つぁぁぁ……頭が割れるように痛い」

店主がスタイアを抱え起こす。

「騎士に手を挙げるつもりはなかったんだ。ほ、本当だ！信じてくれ！申し訳ない」
「いあいあ、今のは僕が悪い。この子、どっかで見たことがあると思ってね。僕の知ってる子なんだ」

スタイアはじっとりと脂汗の浮かんだ顔で苦笑した。

「騎士のお知り合い？なんでまた泥棒なんか」
「一度会っただけでね。まぁ、旦那さんくらいの年になればわかるでしょ？」

少女は怯えたままスタイアと店主を交互に見る。
一瞬、スタイアが目を細めて少女を見つめるが、すぐに店主に向き直る。

「まぁ、旦那さん。商売ってのは一つ盗られりゃ、十売らないと元が取れない。その年じゃあ、同じくらいのお子さんも居るでしょう？何度も盗られりゃ怒る気持ちは判りますが、どうか騎士団の顔も立ててやっちゃくれませんかね？」

店主は少女とスタイアを交互に見比べて渋い顔をする。
その一瞬を好機と取ったのか少女が地面から跳ね上がるように飛んで人混みを割って逃げて行く。

「あ、こらっ！」

店主が追いかけようとしスタイアがそれを手で制す。
懐から金貨を手に取り店主に握らせる。
店主は手の中に握った金貨とスタイアの顔を交互に見比べて困った顔をした。
スタイアは起き上がるとズボンについた埃を払うと僅かに首を振って苦笑だけを残す。
店主はただ黙って、小さく会釈して店の奥に引っ込んだ。
シルヴィアはそれだけで自分の不手際に悔しさを覚えた。
そそくさとその場を離れるスタイアの後ろに小走りで追いつき、頭を下げる。

「……申し訳ありません。私が余計な事を言ったばかりに」

――店主がどういった生活を営んでいるのか、少女が一体どんな生活をしているのか。
片方に偏った物の見方で発した言葉が、店主を怒らせた。
スタイアは曲がった背中越しに苦笑してみせた。

「まんずまず、騎士ってのは痛い商売だから嫌いなんですよ」
「ヘルムの着装義務を守らないからです」

第1章　『最も弱き者』　4

少女は貧民街の裏通りを右に左にと走る。
叩かれた足が酷く痛む。
泥棒を見つけたらまず足を叩け。
商売をする者なら必ず耳にする逃走防止の為の格言を忠実に守られ、少女の足は真っ赤に腫れ上がっていた。
それでも逃げなければならない。
騎士団が下す盗みを働いた者へ科せられる刑罰は、片耳を釘で柱へと打ち付ける。
二度までは耳を引きちぎってその場を立ち去れ、三度目は打ち付ける耳が無いから縛り首となる。
今まで、捕まっても店主から激しい打擲を受けるだけで、騎士団に捕まったことは無い。
そもそも、貧民街まで出てくる騎士が居ることの方が珍しい。
貧民街に騎士が出張るのは壁の内側に貧民街を根城とする組織的な盗賊集団を壊滅させる時くらいなのだ。
時折背後を伺い、追われていないかを確認する。
その姿が見えないからといって安心していいものではない。
泥棒が徒党を組んでいる場合、騎士の中には逃げる泥棒を仲間の元まで逃がす場合もある。
その類では無いだろうが、どちらにせよ捕まる訳にはいかなかった。
路地から路地を抜け、ひたすら走り下水道へ向かう。
首都の地下に張り巡らされた下水道は一つの迷路となっおり、少女のような不法の輩が逃げ込むのには格好の場所だった。
排水を遡って逃げ込めばそこまでは誰も追ってこない。
城壁から排水路に勢いよく吐き出される下水をみつけ、排水口に駆け上がる。

排水口の縁を掴み排水口の鉄格子に飛ぶと、小さな体を鉄格子に滑り込ませる。
糞尿のきつい匂いのする排水が鼻から入るが、必死に目を閉じ、泳ぎ、下水道脇の整備路に捕まる。
汚水を吸い、重くなったボロを捨て疲れた足取りでよろよろと歩く。
背中や足の傷口に汚水が染みてひりひりと痛む。
怪我をしている時に排水を浴びると傷が紫になってとても痛くなるということを聞いたことがある。
どこかで、汚れを落とさなければいけない。
荒くなった息を整えようとして、鼻に入った水が喉を焼いて咽せた。
酸欠で霞む頭に汚臭を含んだ大気を一杯に送り、それでも地上へ出る為の梯子を掴む。
東の貴族街までいけば噴水がある。
そこに飛び込んで、ざっと汚れを落としたらまた逃げればいい。
そう考えながら、下水道の上げ蓋を開けた。

「ほいつかまえた」

首根っこを掴まれ引きずりあげられた。

「あ」

声にならない声を上げて、少女は自分を掴み上げた人間を見る。
片手で軽々と持ち上げているのは、先程の騎士――スタイアだった。

「このっ！離せっ！離せよぅっ！」
「わ、わ！ばっちい！暴れなさんな！」

少女はスタイアの腕に力一杯かみつくが、堅い腕の表皮に僅かに歯が食い込むだけなのに驚いた。
暴れる少女から飛んだ汚水を思いっきり顔に被ったスタイアは染みる目を抑えながら、少女を地面に降ろす。

「店主とは話をつけてきましたよ。全く、無茶な逃げ方をするもんですね。どれ」
「わ！変態！何する気だ！体を売る気はないぞっ！」
「舐めても小便の味しかしない子供には興味ないからどうぞお構いなく」

少女が嫌がるのにも構わず、服を捲るスタイア。
少女の背中の表皮が破け、そこから血が滲んでいるのを見て思わず眉を潜めた。

「……破傷風が怖いですね。うちに来なさい」
「二度と行かないって言っただろ！」
「なら、選びなさい。騎士団で律法の裁きを受けるか、僕に従うか。シャモさんが言ったように、強い奴だけが与えることを選べるんですよ」

スタイアは少女を黙らせると、帯皮に吊した畳まれた外套を広げ少女に被せた。
騎士が雨天時の巡回に使う綿でできた外套で、所属する騎士団の紋章が刺繍されており買おうとするとそれなりに値段のするものである。
汚水が染みこむのを全く気にせずスタイアはそれをすっぽりと被せたのだ。

「ようやく、追いつきました」

がちゃがちゃと重い鎧を鳴らし、シルヴィアが追いつく。

荒い息を整えながら生真面目な瞳をぶつけてくるシルヴィアに少女は身を縮める。

「騎士団に連れて行くのですか？」

「このままじゃばっちいからね。うちの店で風呂に入れますよ」

スタイアはそう言って少女の手を引く。

「……その後はどうなさるおつもりですか？」

「さて、どうしましょうかね」

「騎士団では少女といえ律法の裁きを受けることになります。教会で保護するのが最善の策と思います」

スタイアは歩きながら揺れる。

「だろうねえ。王国律法は事情があったとしても容赦なく裁いちゃうからねえ。教会主導の聖堂騎士が扱えば情状にあわせた酌量ってのも図ってくれるしねえ。アっちゃんもそれを考えて聖堂騎士との業務統合を受け入れたんだろうねえ」

「……わかってらしたんですか？」

「騎士団ってのは男社会です。でも、世の中には優秀な女性も多い。がしかし、優秀な女性が台頭するのを好ましく思わない人達も居る。比較、女性が多く登用されている聖堂騎士が騎士団と混ざれば契機にはなる、という見方もできますしねぇ？」

シルヴィアは黙った。

――スタイアの言ったそれが騎士団と聖堂騎士の業務統合の本当

の目的だからだ。
だが、それでもシルヴィアは騎士団が手を伸ばせない領域で誰かを助けたいと思えるだけの若さを持っていた。
「寄る辺なき者に対して、教会は寛大です。その少女は我々が保護します」
「教会で保護して、シルちゃんがずっと面倒を見てくれるんですかね？」
スタイアはどこか底冷えするような声で呟いた。
「え？」
「罪を犯す少女を騎士団と合同で聖堂騎士が保護し、更正に導く。確かに、それは美談となりますし、それが望む形ではあるんでしょうし、それが最も望ましい。シルちゃんが使命感に燃えるのもよく理解はできる。応援も手助けもしてくれるでしょう。ただ、果たしてそれが正解かどうか。間違いだったときに君は責任を取れるんですかね」
少女は自分の手を引く騎士の中に恐れを感じさせる何かを見つけた。
シルヴィアは自分の考えのどこが間違っているのかを考えている間に、その答えをつきつけられた。
「三日後には教会からこの子は居なくなってますよ」
突きつけられた結論に、シルヴィアは納得しかできなかった。
教会は保護し、修道院で自立できるまでの生活と教育は面倒を見る。
ただ、望んで抜け出す人間を追うことまではしない。

がしかし、シルヴィアが僅かに見ただけでもこの少女の逃走の仕方は異常だった。
執念、といえるようなものを持っている。
「強い人間は選ぶことができる。それくらいには強い子ですよ。この子は」
少女は汚水でぬめる手を強く握る騎士の手の大きさに初めて気がつき目頭が熱くなった。
シルヴィアは自分が聖堂騎士であり誰かを救える立場にあり、その本質を見抜けなかった未熟さに唇を噛んだ。
「……私は、また間違っていたんですね」
「間違えるのは誰だってしてることだし、この子も間違えてる。僕のしていることも果たして正しいのかと問われれば正しいとは言えない」
少女は黙って、スタイアの言葉に耳を傾けていた。
「スタイア隊長。では、何が正しいのですか？」
「知らないよ。ただ、でも、規律も秩序も人が作ったものならば、その人をないがしろにしちゃあいけないと僕は思うだけですから」
シルヴィアは立ち止まると、小さく一礼した。
「……もう一度、あなたの下で学ばせてください」
「嫌ですよ面倒臭い……それに、いつまでも誰かにすがって生きていける訳ではないでしょう？何度も失敗して自分で覚えて行けばいいんですよ」

スタイアは苦笑すると遠くにリバティベルの看板を見つける。
少女が顔を上げると、シルヴィアはどこか優しげな笑みで少女を見ていた。

「シルちゃん、申し訳ないけどアっちゃんに寄り道してから帰るって言っておいてくんないかな。帰るってあれだよ？騎士団に帰るって意味じゃないからね？」
「サボり了解」

第1章　『最も弱き者』　5

公衆浴場ではなく風呂という設備を設けている場所は一部の貴族を除いて、そう多くあるわけではない。
高級宿や人気のある安宿に備え付けてある場合もあるが、公衆浴場での湯浴みが庶民としては一般的であり、そうそうお目にかかれるものではなかった。
そういった意味で、リバティベルはヨッドヴァフ中を探して唯一、風呂場を持っている酒場となる。
元来は向かいの宿屋『海羊亭』が客室を拡張する際に一階部分の食堂を取り壊し、食堂を別棟としてはじめたのがリバティベルの始まりであり、今でも続く慣習である。
海洋亭には増設できる場所が無いことから、リバティベルの裏に浴場を作った為に酒場でありながら風呂を持つという経緯に至る。
とはいえ、四方を板で囲い、石材を並べて作った浴槽に湯を張るだけの簡素な代物だ。
店主が趣味で並べた植木がいささか他の公衆浴場と違い、屋外で風呂に入っているような趣にさせるが、仕切りの向こうに見える外壁が景観を著しく悪くしていた。
湯が張られたばかりの浴室で、ラナは黙って少女の体を洗っていた。
少女の体にはいくつもの傷があり、そのうちいくつかは黒ずんで跡になっているものがあった。
少女はラナを警戒しながらも、されるがままに体を洗わせているうちに、ラナがとても丁寧に体を洗ってくれることに気がつき、気を許した。
張り詰めていた緊張の糸が解け、痛みと眠さが意識の中でよみがえる。

「ねえ……」

おずおずと漏らした吐息に乗せた言葉が喉の奥にからみつく。

「……本当は嫌じゃないの？」

「何が」

「あたし……くさいから」

「くだらない」

「……あたし、牢屋に入るのかな？」

「そんなことはしないと思う」

「なんで？人のもの盗んだのに？」

「まっとうな泥棒には手ひどいことはしないわ。スタイアは」

スタイアの振る舞いは、少女を騎士団に連れて行くことはしないだろうと確信させるものがあった。

少女の頭に湯を被せ、熱いタオルで顔を拭いてやりながらラナは考える。

この少女は、とても聡明なのかもしれない。

自分のしていることが社会的に悪いことであることを認識している。

まともな教育を受けられない中で、自分の行為が悪いと認識できるのは相手がどのような被害を被るか想像できるからだ。

――盗まれた相手が困るということを十分に理解しているのだ。

追い詰められた人間というのは自分の事で精一杯になる。

飢えと寒さに迫られる毎日の中、生きる糧を奪った相手の痛みを共感できるというのは易しいことではない。

ラナはしばらくしてから、言葉を継いだ。

「疲れたでしょう？」

無遠慮に頬を押し上げるタオルに瞼を細め、少女は湯と違う物が零れるのを隠した。
少女はそれでも必至に肩に力を入れてか細く応える。
「あたしより、辛い子もいるもん」
ラナは眉を潜めてほんの少し、考えた。
「……誰か、助けたい人が居るの？」
少女はタオル越しにラナの手のひらに鼻を押しつけ、小さく頷いた。
「……一緒に暮らしてた子。名前は無い」
名前が無いのは親が居ないからだ。
親が居ない子供は往々にして孤児院に引き取られるか、奴隷として誰かに売られるか。
そのいずれにも当てはまらない場合、浮浪児として生きていく為に盗みを働く。
盗みを働く子供達の間では、捕まった時に仲間の名前を言わないように名前が無いままにしているのだ。
いや、当然のように呼び合うための名前はある。
だが、それは決して誰かに知られることはなく、墓に彫られることもない。
それが、彼女やその周りの人間の当たり前なのだ。
「人さらいに捕まって、売られちゃった。お金、持ってけばかえしてくれるって言ってた」

ラナはそれでようやく合点がいった。
非公然だが泥棒にも秩序がある。
金を持っている相手から、自分が困らない分だけ盗む。
貧しい時代を経験しているヨッドヴァフの住人はそれくらいであれば許容する。
それを越えて大きく仕事をすると、スタイアのような騎士もその取締を厳しくするし、なにより、それで飢える者もでてくるからだ。
そうなると、同業者からも相手にされなくなる。
当然、少女もその理(ことわり)を知らない訳が無く、少女の体に残る傷跡にはその理を無視した証拠である。

「その子は、もう、戻らない」

ラナは言い切った。
少女が驚き、ラナを見上げる。

「あなたが買い戻すまでに、その子は奴隷として生きていかなくちゃならない。安い額ではないのなら、その子は奴隷として生きていく方法を覚えてしまう。あなたが買い戻して自由にしてあげても、染みついた生き方は変えられない」

少女は緩みかけた心の糸を張り直して、顔を背けた。

「それでも、やるもん！」
「できるわけない。奴隷一人の値段がどれくらいのものか知っている？」
「……金貨二千枚、いくつか数えられないけど、たくさんだって話は知ってる」

それは明らかな嘘である。

金貨一枚あれば贅沢をしなければ一月は生きていける額である。
金貨二千枚とは貴族の邸宅が造れるくらいの値段である。
だが、しかし、彼女にはそれが全てだった。

「今、どれくらい持ってる？」
「金貨一枚……今日盗んだものだけど……」
「諦めなさい。それが嫌なら、頑張りなさい」

ラナは淡々と応えた。
ラナが言ったことは事実の一つではある。
しかし、買い戻すと決めた少女の代わりに金を出せる訳ではないし、出してはいけない。
そして、その現実は厳しくてもやると決めた人間にしかできないことであることをラナは知っていた。
少女はラナの手から逃げるように浴室を出ると一人で体を拭いて新しいシャツに身を包んだ。

第1章　『最も弱き者』　6

「んー、可愛いな」
「ほら、やっぱり可愛いでしょ？」

リバティベルのカウンターでごろつくスタイアとシャモンは風呂から上がり、服装を整えた少女を見てエールの杯を傾けていた。
今まで一度も可愛いと言われたことの無い少女は、赤くなって俯く。

「最初見た時は泥臭いガキだと思ったけど、風呂入れば変わるモンだな」
「泥被って髪もぱさぱさだからわからなかったでしょうけど、目鼻筋も整ってるしいい線いくんじゃないかなーとずっと思ってたんですよ」
「これはこれでなかなかそそるモンがあるじゃないか」
「でっしょう？たまにゃーロリータ趣味も悪くないでしょう？」
「でもよースタさん。ロリって実際どうなんだ？ぶっちゃけ入らないだろ？」
「そりゃあ、そうでしょう。むしろ入っちゃったら逆に僕らのも子供サイズってことになっちゃうからそれはそれで哀愁をびんびんに感じちゃいますよ」
「そっか、感じちゃうのか。びんびんに」
「感じちゃうんです。びんびんに」

既に大分酔いが回ってきているスタイアとシャモンは一斉にげらげらと笑い出した。
下品に笑う男達を少女が怪訝そうに見つめる中、ラナは溜息だけつくと、厨房でヨブ鹿のステーキに火を通す。

表面に火を通すと、ヨルクマトンのチーズをたっぷりと肉の上にのせ、オーブンで溶かすとその上から常時煮込んであるソースを掛けて、副菜を盛りつける。
ポタージュのスープとパンを添えてトレーに乗せると、カウンターで待つ少女にそれを振る舞った。

「……私、お金無いよ？」
「食べなさい」

ラナはエプロンで手を拭くと、シャモンとスタイアのエールのグラスを下げる。
鼻をつくチーズの芳醇な香りと、肉汁のはねる肉の濃厚な甘い匂い、もうもうと湯気を上げるポタージュの匂いが少女に空腹を思い出させる。
少女はラナとスタイアの顔を交互に見る。
スタイアはようやく少女に気がつき、小さく頷いて促した。
少女は何も言う暇も無く、かぶりつくようにフォークとナイフでステーキに挑みかかる。
獣のように食べる姿を見かねたラナが肉を切り分ける横で、スープの熱さに少女が咽せる。
思わず、笑ってしまいそうになるような味を堪能し、喉に押し込む度に腹の底に落ちる感覚を覚える。
皿を舐めて最後のソースの一滴まで食べ終えて、余韻に浸る少女だったが、やがて、思い出したかのように厳しい顔つきを取り戻し、カウンターから離れた。

「おや、もういくのかい？」

少女の様子に気がついたスタイアは酔いの回った瞳で少女を見つめた。

「うん」

少女はスタイアに向けて大きく頷くと鼻を鳴らす。

「ここにはもう来ない」

少女はきっぱりとそう言い切って口のすり切れた袋から金貨を手に取る。

それを力一杯、スタイアに投げつけて未練無くドアを開けてグロウリィドーンの街の中へ消えてしまった。

スタイアは受け取った金貨を指で弾くとポケットの中に仕舞う。

「スタさん。そいつぁ賄賂って奴じゃないのかい？」

シャモンは苦笑する。

「へっへ。いい仕事でしょう？」

スタイアはシャモンの冗談に乗って苦笑した。

「しかし、いいのかい？行かせちまって」

「貧すれば鈍する。あの子は利口ですよ。ここに長く居たら、自分を支える物がなくなっちゃうってことに気がついたんでしょう」

「で、今の生活に逆戻りだ」

「さぁ、どうですかね？あの様子じゃあ、何か思いついたみたいですし、そりゃあないんじゃないですかね？お腹いっぱいになって少し休むと、どうにかいい考えってのは浮かんでくるモンなんですわ」

「……見越して飯喰わせたのか」

「手を貸して甘えっぱなしになる人間は容赦なく切り捨てますよ僕は。とてもじゃないけど、他人の人生背負い込めると思える程、自惚れてはいませんから」

スタイアはそれだけ言うとカウンターを離れる。

「でも、いちおー、虫を飛ばしておきましたよ」

「……へぇ、ユロの野郎が珍しく昼間に居ないと思ったらそういう理由かい」

ラナがスタイアの外套を手渡し、スタイアは手早く外套を羽織る。

「そいじゃま、夜遊びしてきま――」

そのまま店を出ようとしたところ、スタイアはドアを開けたところで誰かとぶつかる。

転びそうになったスタイアを支えたのは黒い僧衣を纏った偉丈夫だった。

「大丈夫か」

「おや、噂をすればなんとやら――ユロさんじゃないか」

浅黒い顔を戸惑いに彩る偉丈夫――ユーロからは土の匂いと、僅かな腐臭がする。

シャモンは酔った眼を細め、ユーロを見つめると、ユーロは思わず目を逸らす。

「……墓堀が昼間から出歩くなんざ、珍しいと思ったんだよ」

「そういうときも、ある」

ユーロはぼそぼそとか細い声で応えると、カウンターに座った。

「つきとめた」

「あんだって？」

「ビリハム・バファー伯爵が教会から預かった身よりの無い子供を貴族の間に奴隷として斡旋している」

シャモンは酔った頭で色々と考える。

ユーロは結論からまず話す癖があり、それがしばしば人の誤解を誘う。

それは本人も気にする悪癖だ。

「――奴隷制度は何年も前に廃止されてんだぞ」

「だが、おかしい」

「そりゃそうだ。律法で禁止されたことを律法を決めた貴族が破ってるのはおかしなことだわな」

「――売られていく人数と、集められた人数が違う」

そこでシャモンは眉を潜める。

スタイアは笑って応える。

「……奴隷を売買すること自体は問題じゃあないんですよ。そうしなければ生きていけない人だっている。シャモさん、僕らはそういう時代の人間だったでしょう？――だけど、問題は、その奴隷をどのように使っているかが問題なんですよ」

スタイアの目は笑っていなかった。

シャモンはひとしきり顎を撫でて考え、しばらくして大きな溜息をついた。

その瞳からはもう、酔いが消えていた。

「……今夜にも、鐘は鳴るかね？」
「鳴らしましょうかね」

第1章　『最も弱き者』　7

グロウリィドーンの東部には貴族街が広がる。
爵位を得た者達は治世の要職につき、この場所に邸宅を構えることを一つのステータスとしている。
政治の要となるヨッドヴァフ騎士団、聖フレジア教会、貴族院、枢機院といった建造物は全てこの東区画にあった。
少女は夜でも街灯が灯され、視界の効く町並みを小走りで歩き、一つの邸宅を見上げた。　ビリハム・オファー伯爵の邸宅である。
グロウリィドーンの建築当初に構えられた邸宅は高い外壁に囲まれた二階建ての石材で組まれた邸宅である。
少女は荘厳な門の前で、執務を終え邸宅に帰宅するビリハムを待ち受けることにした。
宵が深まる頃、邸宅に馬車が乗りつけ深緑のチュニックに身を包んだビリハムは戻ってきた。
随伴する召使いが門の横に佇む少女を見つけ、怪訝な顔をする。
ビリハムも少女の思い詰めた表情を見て、怪訝な顔をしたが、すぐに用向きを尋ねた。

「この時分にいかが用件ですかな？」
「……家を追い出されました。どこか、働かせてくれる場所を探しています」

ビリハムは少女を値踏みするように頭の先からつま先まで眺めると、召使いに小さく耳打ちすると寛容に頷いた。

「それであれば、力になれることもあるだろう。中に入って、ゆっくりと話を聞かせて欲しい」

少女は小さく頷き、ビリハムの後に続き邸宅に招かれた。
外壁の内側には豪奢な庭園が広がっており、家を取り囲むようにゲッケイの生け垣が広がり、庭木として植えられたスマラグが道の脇に並べられている。
シャンデリアのある広いホールを有した邸宅に入ると、ビリハムは少女を客室に招くように召使いに指示した。
召使いは僅かに頭を下げると少女の手を引き、地下室へ向かった。
石壁で支えられた地下室はどこか冷たく、灯されたろうそくの明かりがぼんやりと揺れていた。

「あの、どこへ……」

召使いは何も応えず、少女の手を乱暴に引くと、地下室の一室へ乱暴に放り込んだ。
少女は冷たい石床に尻を打ち、小さく悲鳴を上げるが、召使いは冷たい眼差しを向けたまま扉を閉めた。
がちゃりと鍵のかかる音がして、少女は地下室に取り残される。

「待って！お願い！一つだけ教えて欲しい！」

地下室を立ち去ろうとした召使いの足音が止まる。
少女は扉に駆け寄り、精一杯の声を上げて尋ねる。

「恵雨の月の初めの頃に、金色の髪をしたあたしと同じくらいの子がここに来てるの！その子が今、どうなってるのか！それだけ！それだけでいいから教えて！」

召使いの靴が石床を叩く音が大きくなり、やがて扉の前で止まった。

「知っているのね？」
召使いはどこか冷めた声でそう尋ねた。
「……うん。多分、私も奴隷として売られる。それは、わかってる」
しばらくの間、召使いは沈黙していた。
「その子なら、よく覚えてる。体の弱い子だった。勤めに耐えられず、すぐに死ぬとわかっていたから誰も買わなかった」
「じゃあ！まだ、ここに居るの！？居るのね！？」
召使いは答えない。
少女はその沈黙に別の意味を受け取った。
「……うそ」
少女の頬にすっと、一筋の涙が差した。
震える喉が嗚咽を零しはじめ、膝が力を無くしはじめる。
今日まで少女を支えてきたものが、ふと目の前から無くなり、少女の肩に疲れがどっと押し寄せてきた。
自分を慕ってくれただけの少女で、何をしてくれた訳でもない。
辛くても、生きていく事を互いに誓った。
その少女の前では、彼女は強くなければならなかった。
だが、もう、そんな必要も無い。
そうなったとき、少女はただの少女に戻ってしまったのだ。
「扉の鍵は開けておくわ。落ち着いたら、逃げなさい」

召使いの声はどこか、疲れていた。
少女は疲れた中、ただ、どこかで触れたことのある良識だけで尋ねた。

「……どうして、そんなことしてくれるの？」
「私にはこんな生き方しかできませんから」

召使いはそれ以上、何も言うことなく足音を遠ざけた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

暗い石壁に囲まれた部屋で少女は体を横にしていた。
今まで張っていた緊張の糸が全てほぐれ、生きていく意味を無くした少女は最早、立ち上がる気力も無かった。
それでも覚える空腹に鬱陶しさを覚えながらも少女は冷たい石床に顔を擦りつけた。
振り返れば、空腹と痛みだけが自分を生かしてくれた。
名前も無く、ただ一度も満足に腹を満たしたこともなく、飢えと寒さに耐え、最後はこの地下室で病死したと考えると、とてもやりきれなかった。
かつて仲間だった者も、彼女から離れていった。
弱い者は淘汰される。
足も遅く、体も弱く、何一つ、彼らに貢献できなかった彼女は、生きる為に彼らの食事を減らさなければならないことから切り捨てられた。
それは、受け入れなければならない現実であることは知っていた。
彼らもまた、ただ一度だって満足に腹を満たしたことが無いからだ。
自分を慕い、自分のようになりたいとかつて言ってくれた少女を鬱陶しいと思ったことは何度もあった。

だが、無くして初めて、自分がその弱い少女に支えられて強くあったことがわかる。
人は自分の為に卑しくなれるが、貴くあるのはいつだって他人の為だ。
流れに、身を任せよう。
少女は諦めて身じろぎする。

「ごきげんよう」

ビリハム・バファーは穏やかな笑みで少女に声をかける。
少女は床に寝そべったまま、動かなかった。

「君は、いつぞや私が保護した少女の知り合いみたいだね」

少女は答えない。
ビリハムは続ける。

「どこまで知っているか知らないが、それはよくないことだ。人は誰しも秘密を持っている。秘密は誰にも知らされず、伏されているからこそ大切なのであって、それを吹聴してまわるのはとてもよくないことだ。もちろん、私は君がそのようなことをするような人間ではないと知っているし、信じている。だけど、わかって欲しい。人は誰しも臆病で、私も残念ながら臆病な人間なのだ。そこで、だ。私は君とその秘密を、そう……なんといったらいいのか、共有したい。お互いに秘密を持つのだ。そうすれば君は私の持っている秘密を深く知ることで私を信じてくれるし、私も真に君を信じることができる。その秘密は君の知っているあの子、そう、あの子だ。とても可憐な子だ。金色の豊かな髪をして、とても優しい眼差しをしている。あの子もまた、共有してくれたものだ。どうだろう？私とその秘密を共有してくれないだろうか？」

長々と喋るビリハムに、少女は僅かな違和感を覚えた。

「……生きてるの？」

「誰が、そのような悲しいことをいったのかわからない。メラージェンが言ったのであれば彼女にも、正しく、伝えねばならない。それは私が彼女を引き受け、彼女の生きる道を示さなければならない身分にあるが故の義務だ。だが、問題はそこじゃあない。君はひょっとして勘違いしているかもしれないが、そう、あくまで勘違いしているものと思って尋ねるが、その子が殺されて……いや、フレジアの光に祝福されたと思ってはいないかね？だとしたら、悲しい。私は大いに悲しい。その誤解をどうか、私に解かせてくれはしないか？どうだろう？」

ビリハムの言葉には嘘は感じなかった。

だが、どこか狂気に触れた危険さを少女は既に感じていた。

少女はゆっくりと身を起こし、気だるげだが、それでもしっかりと応える。

「会わせて」

第1章　『最も弱き者』　8

少女はビリハムに連れられ、地下室よりさらに地下へと連れてゆかれた。
まるで少女を逃さないようについてくる召使いの顔がどこか、悲しげに見えた。
そこは古い下水道の一画で、穿たれた壁にしつらえられた鉄格子があった。
明かりが灯らず、薄暗い地下道の中に少女は嗅いだことのある匂いを僅かに嗅いだ。
糞尿の、匂いだ。
ビリハムが持つ燭台の光では良く見渡せないが、鉄格子の奥で僅かに首をもたげる様子が伺えた。
人だ。

「歴史は、変わった。私は理解に努めている」

ビリハムは唐突に語る。

「世界には賢き者とそうでない者の二種類の人間が存在する。賢き者はそうでない者を導き助ける使命がある。これを高貴なる義務という。それは正しく果たされなければ、ならない。なぜなら、賢き者もやはり、そうでない者たち無くしては生きてはゆけないからだ」

少女は黙って聞いていた。

「もし、世界が賢き者だけだとしたら、そこには石工も居なければ農奴も居ない。そうなれば家を失った賢き者達は寒さと飢えで死

に絶える。だから、賢き者はそうでない者達を導き、彼らがより豊かな生活を送れるように導かねばならない。私は賢き者として導かねばならない。そうして、世界はよりよく回っていく」

長く続く地下道の雰囲気が僅かに変わった。

「人は増え続ける、そうなれば賢き者に対してそうでない者の数の方が増える。そうなればそうでない者達は少ない日用の糧を互いに奪い合うようになり、争いが起きる。我々賢き者は彼らにどうやってその日用の糧を与えるか、それのみに苦心しつづける」

鉄格子、ではなく、鉄の扉が穿たれた石壁を塞ぎ、石壁には無数の爪痕が刻まれていた。

「奴隷制度、それは生まれながらにして持たざる者を救う一つの方法ではあった。がしかし、時が進み、やがて彼らが富を得ると彼らは賢き者達が行った事に対し異を唱え始める。果たして、そこにあった彼らの生活の保障というものを理解することなく声高く訴えるのだ。我々に自由を、誇りを、と」

重々しい鉄扉が激しく揺れた。

中で尋常ではない悲鳴が響き、地下道が揺れた。

だが、ビリハムはそよ風でも吹いたかのような微笑を讃え、続ける。

「賢き者はその言葉を真摯に受け止め、喜ばなければならない。それはそうでない者達がようやく自分らが食を得るためだけに働くことから、生きる意義を求め始めたからだ。賢き者として彼らの非難を甘んじて受け、そして、彼らに求めるものを与えなければならない」

少女は生ぬるい風を受け、恐怖がつま先から昇ってくる感覚に身を震わせる。

「そこで、賢き者達が作ったのが冒険者制度だ。力なく、知恵なきものに、力と知恵を与え、人に害為す存在を駆逐するという使命を与えた。その存在が経済に新たな需要を与え、その需要を中心に世の中が回りはじめる」

やがて、地下道がとぎれ、燭台は小さな祭壇を浮かび上がらせた。
床にびっしりと描き込まれた魔術文字と陣。
祭壇の上の天秤に乗せられた心臓と青銅。
そして、壁一面に貼り付けられたタペストリーに打ちつけられた――

「きゃあああああぁっ！」

それは、大まかに形容するなら、蜘蛛だった。
剛毛に覆われた節くれだった八つの足を持ち、大きく膨らんだ腹を持つ。
ただ、腹は二つあり、その真ん中に大きく膨らんだ尾を持っていた。
腹は薄い皮膜で覆われており、青い体液が透けてみえていた。
律動する腹部には苦悶に彩られた人の顔が浮かんでは消え、髪の毛が揺らめいている。
腹を繋ぐ胴体には百足のように節があり、いくつもの腕が生えていた。
だが、それは昆虫のような節くれだった腕ではなく、人間のそれと同じ腕だった。
いずれも形はばらばらで、上腕が異様に長かったり、中指が伸び

ていたり様々な腕の形をしていた。
豊満な乳房を揺らし、その上には首が3つついていた。
一つはフクロウの頭だった。
愛らしい瞳で瞬き、少女を見て小首を傾げている。
その隣には禿頭の男の首があった。がしかし、これは生気を失いだらりと舌を垂らして白目をむいている。
その隣にだ。
少女が探していた面影があった。

「おねえ、ちゃん？」

うつろな瞳を向け、それは震える声でそう発した。
見れば、節くれだった腹の殻が破れ、そこに口が現れていた。

「酷いっ！なにこれぇっ……ああっ！あぁぁあっ！」

少女は半狂乱になって叫んだ。
ビリハムは淡々と告げた。

「魔物、という生き物が居る。一般的には自然発生しえない生物全般を指す言葉だ。その起源は太古に遡るもので、その当時の記録は手に入れがたいものとなっている。我々は理解に勤めなければならない」

少女には最早、ビリハムの言葉は届いていなかった。

「はじめは、怖いかもしれない。だが、大丈夫だ。君もきっと、理解してくれる」

――最悪の想像以上の、現実を突きつけられ、少女は崩れ落ちる。

膨れた腹がぼこりと人を産み落とし、産み落とされた人の上半身が弾ける。
弾けた上半身から葉が開き、茎が伸びるとムゥムゥと可愛らしい鳴き声を上げながら花が咲いた。
それらはすぐにしぼみ、僅かな青銅を残して跡形もなく消えてゆく。
少女はそのおぞましい光景に膝を折る。

「メラージェン、儀式を執り行おう。銀のナイフを」

召使いがビリハムに紫の布で包まれたナイフを手渡す。
すがるような目つきで見上げる少女に、召使いは僅かに苦悶の表情を見せるが、すぐに能面を作った。
少女は知っている。
それは、人が人を捨てる時の表情だ。
少女と、目の前にいる彼女がかつて、仲間から向けられた顔だ。

「やだっ！やだっ！やめて！怖い！いや……いや！いやぁぁぁぁぁっ！」

銀のナイフを手にしたビリハムはとても悲しそうな顔をする。

「それはとても悲しい。私は秘密を打ち明け、彼女はあそこで君を待っている。だのに、君は我々を受け入れてくれない。それは、とても悲しい」
「違う！絶対違う！人じゃない！あ、あんた人じゃないよ！なんで！なんでこんなことするの！なんで！ああっ！あああッ！」

壁にうちつけられた化け物の腕が伸び、少女の細い腰を掴んだ。
振り向けば、とても悲しそうな顔で少女を見下ろしていた。

「……おねえちゃん、ごめんなさい。わたしが、ぐずだったから。わたしが、やくにたたなかったから。でも、おねえちゃんだけはちがったよね？ずっと、ずっといっしょにいてくれたよね？おねえちゃん、わたしうれしかったよぉ…おねえちゃんが、おねえちゃんだけがわたしにぱんをくれた。わたしはしってるもん。おねえちゃんが、おとなにたたかれてとってきたおかねでわたしのくすりをかってくれたことも。いたかったよね？でも、おねえちゃんは、なにもわたしにいわなかった。わたし、ないてばっかりでちゃんと、ありがとうっていえなかった。ごめんね？おねえちゃん」

魔物となった少女は、自らの口を開き、掠れた声で言った。

「こわいよ、さびしいよ。おねえちゃん、いっしょに……いてほしいよ」

おぞましい腕が少女の頬を撫で、指先が割れ、生えだした舌が少女の頬を舐める。

「やぁああっ！いやぁああっ！」

少女は泣きじゃくり、自分を掴む腕を力一杯叩いた。
粘液で滑りやすくなっていた腕から細い腰を捻り、抜け出した少女を見て、魔物の頭となった少女はとても悲しそうな顔をする。

「うああっ！ああああ！ああああああっ」

少女は後ずさりながら、その視線から目を逸らして泣き叫ぶ。
ビリハムはその少女の肩を掴み、優しく微笑んだ。

「怖いのは、最初だけだ。あとは、もう、何も思い悩む必要は無い」

鋭い痛みが足に走った。
ナイフが太ももに刺さり、ビリハムが押し込むだけで膝にかけて開いていった。

「アアアッ――！ッ――！」

首から脳天を貫く鋭い痛みに悲鳴を迸らせ、少女はのたうち回る。
血を飛び散らせ、這うようにビリハムや魔物から離れようとする。
悲しそうに見つめる少女に途方も無い罪悪感を覚える。

「いやぁあぁ……っ！もう、いやぁああっっ！なんでっ！なんでなんだよぅ！おかしいよ！なんでこんなひどいことされるの！あたしがぁ…あの子がぁ…なにしたっていうんだよばかぁぁっ！あああっ……」

少女は泣きながら、ビリハムを見上げた。
その後ろでは魔物となった少女が悲しそうな顔で自分を見ていた。
躊躇されることなくナイフを突き立てられた太ももが熱く燃えるような痛みを訴えている。
少女は逃げるように這い回り、石床にべっとりと血を引きずる。
ビリハムは這って逃げる少女をじっと見つめていた。
やがて、少女は諦めて、俯いたまま、嗚咽を零すだけになる。
ビリハムはそこでようやくナイフを振り上げ――

「これはいささか、やり過ぎのようだな？」

凜と空気が震えた。

闇の中から、声がしたのだ。
ビリハムは闇の中に瞳を向ける。

「何者かね？」
「我々が何者か？何者でもない。大いなる世界の意思の流れにより我々は常に、影に潜み寄り添ってきた」
「……まさか、フィダーイーの手の者か？」

燭台の炎が次々と消える。
祭壇が真の闇に包まれ、声だけが不気味に響いた。

「全ては調和の上に成り立ち、天秤はどちらに傾いてもいけない。お前は天秤を傾けすぎたのだ」
「私にセトメントを受け入れよというのかね？」
「……残念ながらフィダーイーの意思はない。だが、覚えておくがいい。ヨッドヴァフには警鐘を鳴らす者もいるのだ」

ビリハムはマッチを擦り、燭台に火を灯す。
ぼんやりと浮かぶ闇の中に、小さな――そう、本当に小さな人影が浮かびあがり、ビリハムを冷酷な笑みで笑っていた。
それは人間にしては小さく、両の肩から伸びる透き通った羽がどこまでも不気味に美しかった。

「ごきげんよう伯爵。いずれ、ニンブルドアンでお会いしよう」
掻き消えるように人影が消え、祭壇の燭台が再び灯りを取り戻す。
そこに、少女の姿は無かった。

「……ふむ」

ビリハムは思案して、告げた。

「メリージェン、バルメライ達に仕事だと告げなさい。よもやフィダーイーが我らに翻意するとは思えないが、念には念を入れる必要がある」

第1章　『最も弱き者』　9

少女は気がつけば、屋敷の外に居た。
さきほどまで見たものがまるで、悪夢のように思われた。
だが、ざっくりと裂けた足が現実であったことを痛いが故に証明している。
ぼんやりとした意識を引きずり、それでもこの場を離れなければいけないという意思だけで歩きはじめた。
屋敷が騒がしくなり、物々しい鎧を着込んだ兵達が庭に現れ始める。
痛む足を引きずり、見つからないように逃げはじめた少女は、やがて、痛みに足をもつらせて転ぶ。
這ってでも進もうとして、途中で、諦める。
最早、帰るべき場所も、達すべき目標も無いのだ。
最後に見た、彼女の無惨な姿だけを思い浮かべる。

「くふっ……ウウッ……ウウッぅぅ……」

力の無い者はああやって、強者の玩具として弄ばれる現実に悔しくて泣いた。
握った拳が地面を叩き、赤く腫れる。
ぼたぼたと零れる涙が舗装された道を濡らす。

「悔しいか？」

何者かが少女に語りかける。姿は、無い。

「誰っ！？」

嗚咽を引きずりながら、噛みつく勢いで尋ねる少女に声は応える。
「虫の囁きだ。この通りを真っ直ぐ行って、突き当たりを左、ずっと行くとリバティベルという店がある。この時間ならば、請け負ってくれるだろう」
リバティベル。少女は聞き覚えのある名前に、僅かに怪訝な顔をした。
「何を言ってるの？」
「金貨五枚。それで、お前の代わりに殺してくれる。だが、ゆめゆめ忘れるな？殺すことを選択したのはお前だということをな？」
ぞくりと背筋が寒くなる。
ビリハムを殺せる。
そう思えるだけで、少女の心の中に暗い愉悦が広がってゆく。
自分たちを玩具にした男に制裁を加えなければならない。
少女は痛む足を地面に叩きつけ、歩き出した。

◆◇◆◇◆◇

夜も更け、人も捌けたリバティベルは静かに闇の中にその店を佇ませていた。
少女がウェスタンドアを開けると、チリン、と小さな音が鳴った。
店の中の照明は落とされ、暗い闇に包まれていた。
少女は臆することなく店の中に進んだ。
「こんな夜更けに、誰でしょうかね？」
聞き覚えのある声がどことなく冷たく聞こえた。

マッチを擦る音がして、燭台に火が灯った。
テーブルの上に置かれたろうそくが、背中を丸めて炎を見つめるスタイアを浮かび上がらせる。
「おや、まあ、可愛らしいお客さんだこと」
緊張した面持ちの少女をスタイアは柔らかく、どこか恐ろしい笑みで迎えた。
「……殺したい奴がいるの。ここで頼めば、殺してくれるって言ってた」
スタイアは苦笑する。
「仕事の依頼かい？」
ぼんやりとした光の中に、シャモンとラナの姿が浮かび上がる。
「……嬢ちゃん、銭は持ってるのかい？金を持ってるようにゃ、見えんのだが？」
「今は、無い。けど、今殺して欲しい」
シャモンはテーブルに足をかけ、背もたれに体を預けると鼻で笑った。
「……ダメだ。殺すということは殺されても文句は言えない。そんな仕事を引き受けるのに金を後払いにされれば、死に神に渡す手間賃も払えない。帰れ」
シャモンは冷たく言い切った。

「……そうだね、金貨五枚。それすら用意する覚悟の無い人の仕事は、受けられない」

スタイアは柔らかな笑みでそう告げた。

少女は言葉を継げない。

なぜなら、そのスタイアの瞳はどこまでも笑っていなかったからだ。

しぼんでゆく意思に、少女は肩を奮わせる。

うつむいたつま先に滴る血を見つめ、意を決して前に進み出る。

「私を買って！」

少女は唾を飲み込み、続けた。

「……体を売ってもいい、奴隷として死ぬまで使ってもいい。私を買って、そのお金にして」

シャモンはひとしきり少女を眺めて鼻を鳴らす。

「金貨四枚」

少女は何を言われたのか一瞬、わからなかった。

「自分にどれだけの価値をつけたのかわからねえが、てめえの価値は金貨四枚だ。それ以上は出せたモンじゃねえ」

「そんな！」

「甘えンな。金貨四枚でも充分に高いくらいだ。今のてめえにそれだけ稼げるだけの道が他にあるってか？ああ？」

少女は俯く。
奴隷で売られる人間の値段は、確かにそのくらいの値段なのだ。
理解している。だけど、少女はどうにもならなくて、叫んだ。
「あんた達にはわからないけど、あの子と私は仲間だった！親に捨てられて、気がつけば修道院でパンも食べられずに働かされたの！逃げ出した時には、あの子は病気で拾われた仲間達にも厄介者にされてた！私しか、あの子を助けてあげることができなかった。けどね、結局、あの子は多分……助けられないんだっ！」
語る少女の瞳に、大粒の涙が浮かぶ。
「……神様を信じている訳じゃあないけど、あの子は悪いことは何もしてない！化け物にされる理由なんて、どこにも、無いんだよぉ！お金が足りないなら私を殺してくれても構わない！だから、あいつを殺して！ビリハムを殺して！お願いだからっ！あの子を助けて！もうやだ！こんなのやだ！どうして！どうしていっつもいっつも私たちが酷い目に遭うの！弱いから？子供だから？そんなのってあんまりだよ！」
泣きじゃくる少女をスタイアも、シャモンも冷たい瞳で見つめていた。
「殺してやるぅ！全部、全部殺してやる！ビリハムも！あんたもあんたもだ！そうやって私たちが辛い目に遭ってるのを見て楽しんでるんでしょう！その顔をぐちゃぐちゃにして殺してやる！絶対、ぜったい！ぜったいに殺してやるんだから！」
少女は叫び、その場に膝を折る。

「うあぁぁあああああっ…ああっああっ……あああぁぁ……」

少女の慟哭が、静まりかえった店の中に響く。
ろうそくの炎が揺れ、その中で皆の顔が一様に曇った。
そんな中、スタイアが苦笑して大きく背伸びをした。

「……わかった。引き受けよう」

泣き叫ぶ少女にそう告げる。
シャモンは冷たい眼差しをスタイアに向ける。

「……スタさん。そいつぁ、ちょっと甘くねえかい？」
「甘いですかねぇ？」
「命のやり取りってのは、情じゃねえ。仕事だ。それに、辛ぇだの酷ぇだのでいやあ、そんなモンは誰だって同じだ。俺もお前さんも奴隷やらされてた時に通ってきたことじゃねえか。びぃびぃ泣いたくらいで命取られるとしたら、取る方も取られる方もたまったモンじゃねえ」

スタイアは笑う。

「知ってるよ。知ってるとも。だから、僕が、金貨四枚で彼女を買おう……ラナさん」

ラナは溜息をつき、金貨を四枚テーブルに並べる。

「……身請けして金貨四枚。だけど、一枚足りない」

ラナが初めて口を開いた。
スタイアは懐から金貨を一枚手に取る。

「じゃあ、これで丁度でしょうや？」
スタイアは指で弾き、泣きじゃくる少女の前に放った。
「それで、五枚だ」
少女は泣きながら、目の前に落ちた金貨を見つめ、スタイアを見上げた。
「おいおい、そいつぁ……」
「盗ってきたモンだって金は金、これでいいでしょう？シャモさん」
シャモンは鼻を鳴らす。
スタイアはあらためて尋ねた。
「……さて、お嬢さん。殺しの仕事の依頼かな？」
少女は金貨を拾い上げ、テーブルの上におずおずと置く。
チン、と澄んだ音を立てて金貨がテーブルに乗った。
少女はぐずる鼻をぬぐい、嗚咽が混じる声で絞り出すように応えた。
「……はぃ」
ラナがそれを見届けてから金貨を盆に載せた。
「……確かに、金貨五枚、お預かりしました。お客様、どなたの死をご所望ですか？」

ラナは恭しく少女に頭を下げる。
少女は、涙を振り払い、力強く告げた。
「ビリハム……バファー！」
ラナはハンドベルを鳴らす。
幾度も、幾度も、何かを告げるように鳴らす。
「承りました」
ラナは少女に頭を垂れると、盆をテーブルの上に載せる。
「……引き受けて下さる方は一枚、お取り下さい」
スタイアが一枚取り、シャモンが諦めたように一枚を弾き袖に滑らせる。
闇の中から、ぬっと現れた巨体――ユーロがいかつい手で一枚引き、ラナが一枚。
そして、少女の首元からひらりと人影が飛び、金貨の上に降り立った。
「人が悪いな。スタイア」
「人殺しで金取るような人が善人な訳ないでしょうに。あなたには言われたくないですよ。パーヴァ」
「私の方が人が悪い、と言うのか？残念、私は人ではないからな？」
小さな人――パーヴァリア・キルは不敵に笑ってみせて少女を見つめた。

金貨を小さな足で踏みつけ、光の中に消すと羽をはためかせ、闇に消える。
スタイアは空になった盆を手にし、顔を隠すと穏やかな声で言った。

「さて、じゃあ、いくとしますか」

ラナが差し出した褐色の外套を受け取り、羽織ったスタイアの顔は少女が見たことがないくらいに厳しかった。

「まんず、まず、斬りに行こうか」

第1章　『最も弱き者』　１０

バルメライ・ガンズムはいわゆる、冒険者である。
武器の携行を許され、戦士ギルドで訓練を受け、様々な仕事を仲介されて受ける。
ビリハム・バファーの邸宅に集まったパーティの中にはバルメライの知った顔もあれば知らない顔もあった。
上司の不祥事で軍人としての職を失ってから冒険者に身をやつし、年月を経たバルメライはベテランと言って差し支えない経験を積んでいる。
ビリハム・バファーの邸宅警備に非常招集を受けたこの日、バルメライは嫌な予感がした。
仕事をする際には事前に、色々なイメージをしておく。
そのイメージは実際には違うのだが、概ね、イメージとかけ離れた事態には遭遇しない。
逆にイメージと大きくかけ離れた事態というのは危険なのだ。
だが、バルメライはその日、異常に集められた護衛の数と不穏な雰囲気にただならぬ危険を感じた。

「……賊からの犯行予告があった。嫌がらせの可能性もあるが、一応、念の為に警備をしてもらう。くれぐれも抜かりのないようにな？」

そう告げたビリハムの無表情が隠す恐怖も、また、いつもの仕事とは違っていた。
今夜は確実に何か起こるのだろう。

「しっかし、ま、ただ、金を払うのが惜しいからって夜の夜中に呼び出しますかね」

警護を雇うだけ雇って何も起きない場合もある。
その場合でもしっかりと彼らは給金を戴くが、むしろ、何かあることの方が少ない。
なので、招集を無意味にかける依頼主も居る。

「さあな。だが、一応、仕事だからな」

バルメライは若い冒険者にそう苦笑混じりに告げると、庭を回った。
荘厳さを醸し出す庭園にはものものしく帷子を着込んだ冒険者が立ち回っていた。
冷たい空気に身震いしながら配置箇所の確認を終わり、戻ろうとする。
遠く、遠く、遠雷のように鐘が鳴っていた。
聞き覚えがある。

「なんだ、この鐘は」

近くに居た若い冒険者が応えた。

「たまーに、鳴るんですよ。知ってますか？これ、幽霊が鳴らしてるんですよ」
「幽霊？」
「見た奴が居るらしいんですよ。血に染まったぼろぼろのローブを着た奴が鐘を鳴らしながら歩いてるんです。追いかけても追いつけないでいつの間にか消えてるらしいっすよ」

――このようなよもやま話は、冒険者をやっていれば事欠かない。
真面目に相手をするような話しではないし、話した方も信じては

いない。
バルメライは鼻を鳴らして、邸宅の中に戻った。
邸宅の周囲、内部に配置された警備の数は少なくはない。
賊が侵入したとして、何ができるわけでもないだろう。
だが、しかし、バルメライにはそれでも、嫌な予感しかしなかった。
邸宅のビリハムの私室の廊下から、外を眺める。

「まさか」

庭の中に、血だらけの幽霊が立ち、バルメライを見上げていた。

◆◇◆◇◆◇

深まる闇の中、月明かりだけが差し込む。
吹き抜ける風がぬるく、肌を撫でてゆく。
闇に紛れたスタイアは一度だけ、ビリハムの邸宅を見上げると音も無く歩く。
そのスタイアを追い越し、シャモンが駆ける。
垣根の回りを巡回する警護を見つけ、身を屈める。
シャモンは垣根の影から、影へと身を滑らせ距離を詰める。
まだ若い警護の兵はスタイアの姿を見つける。
そうして、向けられた背にシャモンは駆け寄り、腕を伸ばした。
後ろから現れた手に口を塞がれ、鋭い手刀が腰に刺さり、腰骨を握り、砕かれる。
脳天へ駆け上がる痛みに悲鳴を上げても誰の耳にも届かず、痛みが意識を焼き切り絶命する。
悲鳴を上げる暇すら無く崩れた警護の兵をうち捨てる。
巡回中の他の兵がシャモンの姿を見つける。

「誰だ？」

疾風の如く駆け寄り、シャモンは巡回兵の首を抱える。

「シャモン。地獄の獄卒にそう伝えてくんねい」

短く答えたシャモンが首を折る。

ごきりと鈍い音が響き、あらぬ方向へ曲がり、こと切れる。

声を聞きつけ、兵がわらわらと集まってくる。

「……畜生を喰らわねば生きていけぬ人もまた、畜生。賢しく腹を空かすか、愚かに腹を満たすか。中庸なり難し、ねえ」

シャモンは誰に言うわけでもなく呟くと、闇の中を飛んだ。

夜空に翻る外套の裾にまだ若い衛兵の顔が驚きに染まり、伸びた足が鼻を砕く。

倒れた兵の喉を踵が踏み抜き、仲間をやられた兵が手にした槍を突き出した。

突き出された槍を脇に抱え上げ、放り上げると腕を伸ばし、胸から心の臓を抜き取る。

追いすがる血飛沫を翻り躱し、恐怖に立ちすくむ兵の頭に五指を突き、頭蓋を穿つ。

血の一滴すら自分の手を汚さぬ早業をやってのけ、地面に転がる死体を眺め、シャモンは静かに合掌した。

「往生せえよ」

◆◇◆◇◆◇

堂々と中庭を歩くスタイアを見とがめた衛兵はそれぞれが獲物を

抜き放つ。
スタイアは意中に納めず、歩を緩やかに邸宅へと進める。
その堂々とした佇まいに不気味さを感じた衛兵はおそるおそるスタイアを取り囲み、一斉に獲物を繰り出す。
スタイアが僅かに踏み込み、白刃が閃いた。
大きく踏み出して奮われた剣が、槍、剣、鎧などはじめから無かったかのように荒々しい軌跡を描き、スタイアの正眼に収まる。
スタイアは歩を緩めることなく、歩き向かってくる衛兵を次から次へと切り伏せる。
折れた槍や剣が宙を舞い、その後を追って首や血飛沫が舞う。
褐色の外套が血を浴び、黒ずむが、スタイアは一向に意に介さない。
正面の敵に剣を突き込んだ次の瞬間。
背後から短刀を抜き放ち飛びかかる衛兵にスタイアは完全に背後を取られる形となる。
銀の短刀がスタイアの首筋めがけて打ち込まれる瞬間、その衛兵はもの凄い力で上空に飛ばされた。
見ると、腰に鎖が巻かれていた。
グロウリィドーンの夜景を見下ろし、眼下のビリハム低の庭に巨躯を黒衣に包んだ男が立っていた。
背負った棺桶を掲げ、落下する自分を納めるものだと判った時、既に視界は暗転していた。
蓋を閉じられた棺桶が地面に突き立てられ、鎖が巻き付く。
中から蓋を開けようと力を込めるが、びくともしない。
黒衣の男――ユーロが棺桶を背負い、巻き付けた鎖を力一杯引き絞った。
ぎりぎりと鋼鉄の棺桶がひしゃげ、中からぼきぼきと骨の折れる音が響く。
それでもなおやめることなく鎖を引き絞ると、棺桶が二つに割れる。

おびただしい鮮血が迸り、棺桶の中から肉片が転がり出す。
スタイアは振り返ることなく邸宅の中に歩を進めた。

◆◇◆◇◆◇

庭での騒動を聞きつけた衛兵はこぞってホールでスタイアを迎え撃つ。
二階に配置された衛兵は全て弓を持ち、正面ドアを開けたスタイアに矢を構えていた。
一斉に射られた矢に、動じることなく、スタイアは剣を正眼に構えたまま進む。
矢はスタイアに届く前に、その剣に悉く打ち払われた。
肉厚の剣はまるで盾のようにやじりを滑らせる。
怒号を上げて斬りかかる衛兵の腹を凪ぎ、滑るように邸宅を進むスタイアに雨のように矢が降り注ぐ。
矢を射る衛兵はいくら射ても当たらないスタイアを幽霊のように思い、恐怖した。
幽霊は僅かに二階を見上げると、二階で弓を持つ衛兵達が一人一人崩れ落ちる。
小さな人影がするりするりと各人の首筋に毒を塗った針を刺しているのだが、階下の者は目の前の血だらけの外套に身を包んだ死神が邪法を使ったものとしか映らない。
後ずさりし、逃げまどう衛兵の背中に剣を振るい、スタイアは進んだ。

「名のある者と見た。伺おう」

ただ、状況の成り行きを見ていたバルメライだけが長剣を構えスタイアに対峙した。
その背後にはビリハムが怯えきった顔で立っていた。

スタイアは正眼に構えた剣の切っ先をバルメライに向ける。
「死ねば糞の詰まった肉袋だけが残るじゃないですか。それだけで十分でしょう？」

バルメライは何故か、スタイアに奇妙な親近感を覚えた。
多くの死を見てきた者だけが理解できるどうしょうもない現実。
バルメライは長剣を掲げ、体を開く。
スタイアは正眼の切っ先を後ろに下げ、足を下げ体を開いた。
どちらも自分の一撃に自信が無ければ、できない剣術である。
先に動いたのはバルメライだった。
踏み込み、突き込むように剣を伸ばしスタイアの額を割りにゆく。
さらに体を開き背を向けたスタイアの剣がまっすぐにバルメライの剣を滑った。
剣が火花を散らし、バルメライの剣が根本から切られる。
スタイアの背中に覆い被さるようになったバルメライは懐から短剣を手にし振り上げ、そこで動きを止める。
スタイアの脇から伸びた剣がバルメライの心臓を貫いていた。
切れたフードがはらりと落ち、自らを打ち倒した赤い髪の剣士を最後に見た。
捻られた切っ先がぎりぎりと心臓を破り、バルメライはことときれた。
剣を引き抜き、振り返ったスタイアはバルメライの首を刎ね、あいた手は目の前で開かれていた。
銀翼の兜から零れる赤い髪の剣士はバイザーの奥に眠たげな瞳を鋭く細め、ビリハムを見上げていた。

「ビリハム・バファー、故あってお命頂戴いたします」
「……バルメライを討ち取るとは。いやはや、感服する。フィダーイーのセトメント」

「フィダーイーは国益に殉じない不逞の輩を闇に葬ることをセトメントに託す。さて、ビリハム卿は国家万民に害なす政を成しているのでしょうかね？」
「ふむ、世俗を知らぬただの賊とは違うようだな。君は全ての真実を知って、それでいて私に剣を向けるのかね？」
「幾ばくかの真相は知ってましょうや」

ビリハムは残虐な笑みを浮かべた。

「なれば、当然、これも知っていような？」

スタイアの足下の石床に亀裂が走り、割れる。
床を割って伸びた巨大な足がスタイアの頭に振り下ろされる。
スタイアは地面を転がり爪を裂けると、今まで居た場所に深々と爪が刺さる。
追って振り払われた爪がスタイアの体をすくい、宙に高く放り上げた。
壁の上で跳ねた体が大理石の床に叩きつけられ鈍い音がした。
よろよろと起き上がったスタイアが見上げたそれは、蜘蛛のような、女人のような魔物だった。

「……魔物、ですかい」

目を細くして呟いたスタイアは冷たい眼差しでビリハムを見た。

「飼育するには少々高価な餌が必要でね。楽ではないよ」
「……でしょうねえ」
「必要があるから行うだけの話だ」
「がしかし、いささかやり過ぎたんじゃありませんかね？」

魔物が酸を吐き出し、あわせて爪を振るう。
スタイアの剣が爪の上で滑り、跳躍し翻った身が酸をかわす。
爪の上につま先をかけるとスタイアは駆け上がる。
オン、と空気が震え、浮かぶ青白い炎が揺らめきスタイアを舐める。
剣で炎を切り払い、頭めがけて疾走したスタイアは一刀の下、切り捨てようと剣を振り上げたがそこで躊躇した。
泣き咽ぶ少女の顔があったからだ。

「……おねえちゃん、ひどいよ……どこにいったの……？」

横殴りに振られた腕がスタイアの体を壁に激しく打ち付ける。
ビリハムは鼻で笑い、スタイアを見下ろした。

「所詮、生まれが違えばまた生き方も違う。持てる者の義務を果たせば、持てる者のみが得られる権利もある。義務と権利、これらが人の世を形作る。義務を果たした者のみが権利を得られ、得られた権利を使い、より持てる義務を果たさねばならない」

よろよろと起き上がったスタイアは目の前の魔物を細く見つめた。

「権利にも是非があるでしょうや……人が人をないがしろにしていい程、偉くは無いでしょう」

魔物は悲しげに慟哭を放ち、スタイアに爪を振り下ろした。
剣で受け止めたスタイアの体が沈み、受け止め切れず床を転がる。

「いくら吠えたところで、結果のみが残る。貴様は死ぬ。私は明日からもまた、登城せねばならん」

ビリハムは倒れ伏したスタイアに告げ、襟を直した。
「それでは、私は別宅で寝させてもらう。後始末はせいぜい、騎士団にでもやってもらうとしよう」
立ち去るビリハムの背中を見つめ、スタイアは起き上がる。
魔物は悲しげな瞳をスタイアに向け細く吠えた。
「やれやれ、死ぬるかね、本当に」
息の根を止めんと振り下ろされた爪との間に、割って入る影があった。
「……死ぬにはちょいと、早いんでないかね？」
「シャモさんか」
シャモンである。
シャモンは振り下ろされた魔物の腕をがっしりと受け止め、スタイアを庇うように立っていた。
「しかしまあ、酷いことする奴も居るモンだね。まだ、ちっちゃい女の子じゃあないか。色々やりたいことや食べたいものもあったろうに」
ぎりぎりとたわむ魔物の腕を押さえ込むシャモンの腕が僅かに震えていた。
魔物の力をほんの、ほんの僅かに逸らしながら押さえ込んでいるからだ。
「こうなれば最早、生きてはおれまいさ。堪忍しとくれよ…堪忍

しとくれよ」
「シャモンさん」
「スタさんや、人が死ぬのは浮き世の非情だ。堪えるしかあるめえよ。だがしかし、だからこそ、俺らは精一杯生きねばなるめえよや。らしくもねえ同情して急ぐのは筋が違いやしねえか？」

抑えきれなくなった爪がシャモンの脇下から伸びてスタイアの足下に刺さった。
スタイアはのろのろと起き上がる。
「……そんな風に、見えますかね？」
「暖かい飯でも喰おうや。喰えない奴らの分も含めて」

シャモンが苦笑し、スタイアが苦笑で返した。
スタイアの剣が閃き、爪を断ち切った。

「シャモさん、あとは僕が斬る」
「任せる」

シャモンを下がらせ、魔物と対峙したスタイアは剣を正眼に構え、両手で掴む。

「……ビリハムをつけて下さい。追って始末します」
「あいよ。虫とラナが追う。苦しまずに逝かせてやってくだせえ」
「承知」

スタイアはそれだけ告げると、頭上で剣を回した。
魔物の爪が一斉にスタイアに襲いかかる。
スタイアの腕の中、白銀が閃光となった。
振るわれた爪が閃光に触れた矢先、吹き飛ぶように切り飛ばされ

る。
切っ先は、ゆるやかだった。
歩を進めるスタイアに魔物が炎を吐く。
その炎すらゆるやかに切り裂き後ずさる魔物にスタイアは歩を進める。
「バンショケ・ンセイ・シチュウラ・イケン……リョウンの剣、早く収まらず、遅く非ず、荒ぶる訳もなく、また穏やかにならず、理は無く人が斬るのみ。絶剣だな」
澄んだ綺麗な音を立てて、スタイアの剣が爪を切り裂いた。
「しかし、スタさんはいささか無欲すぎる。いや、俺が下衆なだけか」
シャモンは苦笑してスタイアに背を向ける。
スタイアは微笑を浮かべて魔物に歩み寄る。
足を切り飛ばされた魔物は支えを失い体が傾いだ。
それでも闇雲に足を振るう魔物の最後の足を、スタイアの剣の切っ先が滑った。
「……あ……あ……う…」
全ての足を失い、大理石の床に倒れ伏した魔物の中央、少女が声にならない声を上げる。
「よく、頑張った」
少女は首を振り、泣きそうな顔でスタイアを見上げる。

「大丈夫だよ。彼女は強い、あとは、僕が背負おう」

少女は泣きながら、薄く笑った。

「辛かったろう？お疲れさん」

第1章　『最も弱き者』　１１

屋敷を後にしたビリハムは馬車を走らせると、その行き先を見届けてから歩き始める。

「メリージェン……滞りは無いな？」

「はい」

このような時の為に用意された別宅は三つ、調べれば容易に場所はわかる。

そのいずれにも逃げたように見せてビリハムは水路を船で下った。

ゴールデンドーンは湖面に簡易だが港を持ち、そこから水路を利用して各地との物流を行っている。

本日の事件が明るみに出ればしばらくの間は追求を免れない。

事後処理を行うだけの時間が欲しかった。

「アカデミアには白夜の月までには顔を出すように伝えておけ。あと、連中の身元も洗い出しフィダーイーと協議のうえ、しかるべき措置を依頼せよ」

「了承しました」

「いささか、私も彼らも度がすぎたようだ」

僅かに腐臭をはらむ用水路に浮かべられた小舟を漕ぐ船頭はビリハムを見ようともしなかった。

知らなくていいことを知らないでいることは、彼の知る処世術だからだ。

「真実を知れば、驚くだろう。がしかし、叶わぬまま、彼らも死んでもらう」

暗がりの中、水路を下る小舟が橋の下を潜った。
暗闇がほんの一瞬、舟を覆った。
「どちらまでお出かけですかな？」
メリージェンの首が無かった。
赤黒い血を船底に溜める侍従の死体にビリハムは目を見開いたまま、動けない。
その傍らには褐色のロープを返り血で染めたスタイアが立っていた。
船頭は悲鳴を上げて水路に飛び込み、泳いで逃げる。
一人になったビリハムは固唾をのみ、初めて自分が死ぬ恐怖を覚えた。
「き、貴様、生きていたのか……あれを、どうした？」
「斬りました」
ぶら下げた剣が如実に答えを語っていた。
「貴様、誰に雇われた！ワッケイン伯爵の手のものか！」
「しがない、冒険者でございますよ。あなた方の作られた」
「何が望みだ？金か？地位か？」
「前者にございますよ。金があれば何でもできあす。人の身を買い、踏みにじっても金という免罪符があれば許されましょうや？」
「ならば、貴様の満足する額をくれてやる！これでどうだっ！」
ビリハムは懐の袱紗をスタイアに投げつける。
スタイアの頭にぶつかり跳ねた袋から、金貨がばらばらと飛び散り、水路に沈んだ。

「それじゃあ、いささかお代が足りませぬ」
スタイアは剣を掲げ、ビリハムに詰め寄る。
「いくらだ！貴様の雇い主は私の命にどれほどの値段をつけたのだ！」
船尾まで後ずさり、うろたえるビリハムの肩から腹へ、白刃が走った。
「……金貨五枚」
二つに裂けたビリハムの上半身が水路に落ちて水しぶきを上げた。崩れ落ちた下半身を冷たく見下ろしスタイアはポケットから出した金貨を弾いた。
「畜生には高すぎる値段だろうよ。地獄への渡し賃だ。せいぜい、悪魔によろしくやってみてくださいや」
◆◇◆◇◆◇
アーリッシュ卿が知らせを受けてビリハム邸に赴いた時には既に物事が終わったあとだった。
「鐘の音？」
遠く鳴り響く遠雷のように聞こえる鐘の音を訝しみながら、邸の包囲を固める。

「騎士団長！邸宅敷地内にはビリハム卿が個人的に雇われた私兵と思われる者達の死体と……その……」

シルヴィアからの報告を受け、アーリッシュは眉を潜める。

「なんだ？」

「巨大な魔物の死骸がありました」

「魔物？」

「はい……」

シルヴィアはそこまで告げて顔を歪ませる。

「……わかった。封鎖を厚くし一般人を近づかせるな。まだ、他にも居ないとも限らない。邸宅内の探索はシルヴィア小隊と私の直轄部隊で行う。実戦経験の有無で随伴者を選べ。くれぐれも油断するなよ」

大きな戦役をくぐりぬけてきたアーリィの手配は見事なものだった。

邸宅に入った矢先に、目に入った魔物を見上げアーリィとシルヴィアは眉を潜める。

「……ガルガンチュアン……なのでしょうか？」

「ラルミア……とも言えないか」

「どういう……ことなんでしょうかね？」

「わからない……だけど、魔物がこのゴールデンドーンに居るというのは由々しき事態だ。それよりスタイアはどうした？」

「招集の鐘を鳴らしても来ないようでしたので迎えをやりましたが、不在でした。一体、どこに行ってるのでしょうか？」

「さあな。おおかた、女でも買いに行ってるんじゃないかな。い

つものことだ」
アーリィは溜息とともに零した言葉を恥じた。
「失礼」
「いいえ、おそらくその通りなのでしょうから反論しようがありません」
シルヴィアはそう言って苦笑した。
「それとも、女性の前では不謹慎と思われました？」
「意地悪だな。そういうところはスタイアそっくりだ」
「ありがとうございます……引き続き、探索をいたします。あと、これを」
シルヴィアに手渡された書面に目を通しアーリッシュは眉を潜める。
「これは？」
「邸宅内に先行して入った部下が見つけた書面です……奴隷の売買記録の他に」
「ブラキオンレイドス？……ふむ」
「これは……ゴーレムか何かでしょうか？」
方々に散っていく部下を見送り、アーリィは一人、ホールで魔物の死骸を見上げる。
鋭利な刃物で切り飛ばされた爪の切断面、そして、頭上から真っ二つに割られた少女の体。
いずれも並大抵の腕ではない。

「……いずれにせよ」

アーリッシュはこの日、初めてこの国の裏側に触ったのだった。

◆◇◆◇◆◇

リバティベルは冒険者の集まる酒場である。
冒険者という夢のある言葉の裏には多くの凄惨な現実がある。

「……リヴィウィルの野郎、死んだとさ。魔物討伐隊に参加したはいいが、当初の見立てよりやっこさんの数が多かったらしい。撤退する犬車に轢かれて真っ二つだそうだ」
「ツケ、支払って貰ってなかったのに」
「人生そんなモンだろうよ」

店内に広がっている喧噪の傍ら、シャモンとスタイアはカウンターで静かに話していた。
喧噪は、明日を知れない現実の怖さを乗り越える彼らなりのやり方の一つなのだ。

「人生ってのは細い糸みたいなモンだよ。緩ませれば風に吹かれて飛んでいく、迷えば絡まる、張り詰めれば切れる。一体どれだけの紐が無事に伸びきるかね。生きていくのは、難しい」
「一本じゃあ切れるからよって紐にするんでしょうや」

スタイアはそういって店の中を目を細めて見回した。
給仕するラナに今日の稼ぎを自慢する男の下卑た笑い声に僻むヤジが飛んでいた。
ラナは苦笑すらせずすたすたと厨房に戻ってゆく。
間もなく喧嘩が始まった。

「ラナさんのヒモやってるスタさんが言うなら間違いないねーわな」

シャモンとスタイアはクツクツと笑いエールを傾けた。

「ちょっと！そこ、昼間っから飲んでないで働く！スタさん！さっき騎士団の人来てたよ！仕事サボるな！あとシャモンさん金払え！銅貨四枚！」

甲高い声が店の中に響く。

可愛らしい服に身を包んだ少女が喧嘩の後始末をする為のモップを携えていた。

革ベルトを巻いた首もとで鈴がチリンと澄んだ音を立てる。

「……スタさん、結局、この娘、面倒見ることにしたんか？」

「これで随分、いい拾い物をしたんですよ？なにせ銭勘定にはうるさい」

「スタさんも銅貨四枚！」

「ええ！僕も払うんですか？」

「当たり前！身内だからって容赦しないかんね！」

かしましくまくし立て、店の中を走る少女に二人は苦笑する。

「糸クズでも集めればいずれはぬくい服にもなる、か」

シャモンが呟き、少女が振り返る。

「シャモさんなんか言った！聞こえてるよ！」

「お前さんの服、可愛いなっつたんだよ！」

「お世辞言っても銅貨四枚だかんね！」

ヨッドヴァフの片隅にある酒場、リバティベル。
そこは、冒険者が集まる店である。

第1章　『最も弱き者』　１１（後書き）

第一章、御読了ありがとうございます。
ご意見、ご感想などあればどうぞよろしくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5915y/

誰が為に、鐘は鳴る。

2011年11月26日20時45分発行